

ト

イ

レ

というわけで今、俺はその問題のトイレと対峙しているわけだ……なに？ 読者、てめえ、俺の話聞いてなかっただ！？ 畜生め。分かった。再度話して聞かせてやる。この状況の説明くらい、ここまでの道程での苦勞からしてみれば実にたやすいことだ。

俺がこのトイレの存在を知ったのは、一ヶ月前に近所のコンビニで買ったマイナーな週刊誌でだった。……話し始めてから言うのもなんなんだが、別にこの前置きをそんなに詳しく話す必要はないだろう。要はその雑誌で『とある秘境に謎のトイレが置かれているらしく、そのトイレを利用した者はその場で忽然と姿を消してしまう』という記事を読んで面白かった俺は友人を誘って今日、その秘境の手前までそいつらと一緒に車でやって来たのだった。だがそこからそのトイレのもとへ行くまでには道なき道を進んでいくことを与儀なくされ、その道中、次々と友人たちが体調を崩したりケガを負ったりしてリタイヤせざるを得なくなったのだった。そして、最後までそういう不幸に見舞われなかった俺は、崖の横すれすれを通り抜れたり、朽ちかけた一本橋を渡ったりという危険な行為を経て、ようやくこの場所へたどり着いたのだった。そこは先ほど通ってきた木々があちらこちらで生えているような鬱そうとした場所とは違い、やや開けて視界がよい場所だった。トイレは、まるで俺を迎え入れるかのように正面を向き、フタを開け、中にはそれなりの水をたたえてそこに存在していた。最初、なんの神々しさも感じさせないごく一般的なそのトイレが視界にすっと入ってきた時には、やっと見つけたという安堵感と同時に、こんなしょぼいものだったのかという落胆や、それが意外と自分の家にあるものと似たタイプだったことに対する驚き、このトイレが俺を行方不明にさせることができるのかという疑念や好奇心といったものが俺の内部に次々と沸き上がってきた。そして、俺がそこで排便することに決めたのは極めて自然な流れであったことを付け加えて言っておこう。

話が長くなってしまった。ほら、これまでの道筋を説明している間に、俺はズボンを脱いですでにトイレに腰を下ろしてしまっている。ではここで、このトイレに座ってみて思ったことを言ってみようと思う。まず座る前に、便器のなかに何者かの便が残っていたことを報告する。流し忘れたのか、流さなかったのか、はたまた用を足している最中に行方をくらましたのか。俺は仕方なく一旦それを流してから便座に座ることにした。残されていた便は——心なしか——待ってましたと言わんばかりのすごい勢いで流れていった。さてと、座ってからの感想と言えば——便座は、長旅で苦勞した俺の太ももを癒すかのように程よい温かさを持っていた。言うまでもなく、洋式。場所的に考えればこれも当然なのだが、このトイレの周囲は壁に囲まれていない。圧倒的な解放感俺にストレスを感じさせない。無論、こんな場所でプライバシーを気にしていたってなんの得にもならない。

といった説明もほどほどに、そらきた、尿道を例のアレが勢いをつけて……。嗚呼。なんという、な、な、何と言えども形容できるのだろう、この清々しさ！ 俗に言う『すっきりしたあ』なのだが、通常のそれとは桁違いの快感なのだ——といっても通常のその感覚ですら、男にしか解らないだろう——。さっきまで尿意を我慢していたのは紛れもない事実であるとしても、それに加えてこの心地よさなのだ！ ついでに大きい方も出さ——

《気分を悪くされると困るので、省略させていただきます》

とここで俺は衝撃の事実気づいた。紙がない。トイレのことばかり気にしていたので気づかなかった！ なんという不覚！ ど、どうすればいいのだろう、俺。と混乱していた自分が今となっては恥ずかしい。思わず声を上げて笑ってしまった。横に『ウォシュレット』って書いてあるじゃないか。馬鹿なことを、ははは。疲れて思考能力が鈍っているのだな、きっと。慌てることはなかった。安堵感に満ち溢れた俺は、よいしょ、と呟いて笑いを収められぬ間にボタンを押した。

そこで気づいた。可笑しさのあまり忘れていた。ここでは人々が次々に行方不明となっていることを。便器から音を立てて出てきた棒は水をもものすごい水圧で噴出させ、それを尻でまともうけた俺をどこへともなくぶっ飛ばした。便器に残された俺の便は、次に来る人が用を足すために一旦流してくれるのを待つしかないようだ。

トイレ

<http://p.booklog.jp/book/80356>

↑

そう、ここにそれはある。

著者：重長真

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/greenhilldream/profile>

↑

私のことを知ったところで
あなたの果てしない知的好奇心は満たされないものと信じている。

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/80356>

↑

ふはは、コメントをもらうだなんて、そんな夢見事・・・（泣）

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/80356>

↑

挙句の果てには本棚に入れるか!?
はあ、もっと有意義な書物を入れるべきだと忠告しておく。

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ

↑

これは、その・・・・・・・・。

お世話になっております。

私の書いた物語より断然面白く、有意義な書籍が
そこにはある。